

古田豪作

日田・渡窓塾 最初の門人の死

日田市 大久保正尾

執筆者紹介

大久保氏は本会清田会員と師範時代共に野球をした仲、クラスは三級下。元日田市小学校校長、広瀬渡窓の研究家。清田会員との交友により特別寄稿(用)

その時です。七月九日塾生の古田豪作が桂林園で七く  
なつたのは。年二十二。塾生の死は始めてした。

六七日前から塾生の中で下痢をする者が多かった。豪  
作もその一人でした。求馬(渡窓の通称で、二十四才以前は求馬で  
表わす)も体の調子が悪く桂林園を休んでいて、豪作の事  
を塾の使いの者にたずねたところ

「心配いりません」

ということであつた。ところが日暮れに、令助が駆けつ  
け、

「豪作が急変しました」

という。驚いてかけつけてみると、すでに豪作はこと切  
れていました。(トイレから帰りに眩がして、うち倒れたのが最  
後であつたという)発病してわずか八日目でした。

求馬は父桃杖と相談して、葬式をとりしきりました。  
依座幸六は佐伯藩の用達です。求馬を助けて人を遣り、  
佐伯の父の古田七左衛門に知らせてくれ、共に屍を大  
超寺の銀杏の樹の下に假に埋めました。

それから十日後、佐伯から兄の恵十郎が来て、改めて

葬祭をし、学友の中島益多が碑文を作りました。

初め八日の夜、求馬は夢を見ていました。

「父が死んだ。屍は瘠床にある。求馬は動きまわって  
葬式の事をいりろしている。そばにいて求馬を助く  
る者がある。よく見ると、その人も父であつた。」

覚て後、心ばかりかかつたが、夢をかきまになつた事ではあ  
るし、深くは気にかけないままであつた。ところがその  
翌日は豪作の死でした。

「予(求馬)、父ト行キテ事ヲシマツル時、夢中ノア  
リサマト彷彿(そっくり)タリ。」  
とありませう。

求馬は、遠く故郷を離れてはかなく死んだ門生を哀れ  
み、「哭詩」(大勢で悲しみ泣きながらの詩)を作りました。

哭詩

書劍(書生)西(日田)に遊学して竟に帰らず。  
或(ある)屍(死んだ)の目(ま)からは、もう家に宿る路(みち)はない。  
憐(あはれ)なるかな今夜父母の夢の中に現れて、  
猶(なほ)僕(わが)たよと女色(にせ)の衣(き)を着て戯(たわぶ)れている

親(おや)の墓(はか)もとに帰りたかつたろうな男(おとこ)と思(おも)うと、泣(な)けて泣(な)けて  
ならなかつた。

豪作は益多と今年三月に入門、共に佐伯の秀才で、学  
を愛する藩生毛利侯から、学資を賜つての遊学でした。

学問が進んだ後は、共に藩校(四教堂)の教授となる以  
ずで、大いに期待されていた青雲の士でした。

豪作は温良な君子(紳士)で、益多と共に案(あはれ)に得がたい  
人物でした。終(つい)に志(こころ)とげず、それが哀(あはれ)れでなりません。

翌年(つぎ)の七月九日は、豪作の一周忌(いっしゅうき)でした。求馬は「懐  
憶(なつかしみ)へ悲(かな)しみいたむ」の感(あはれ)に耐(た)えず」として、簡素(かんそ)ながら追悼(おんたう)

会をいたしました。

(この項終り)

(什記)

古田豪作は時ハ藩侯高翰より学資を給され、中島子玉(益多)と共に咸宜園に留學した。子玉についてはいふに依えられては、豪作については資料その外ほとんどわからなかつた。たまたまた大久保先生から格別のご寄稿をもつて教えられることにありがた。

なお豪作の父七左衛門は、友朋するところでは佐伯市本所の古田齒科医院(当主竹脚夫)の祖先、墓は久成寺にあるという。稱と得て古田家を訪い、また古田豪作のお墓を久成寺境内墓地にさがしたい。

(丹紫)

探訪記

飯肥城址

史談会ニ〇周年記念行事の一つとして、去る四月十五日バスで霧島から鹿児島を登り、檜島に一泊、十六日、日南海岸へ

九州の小京都とよばれる飯肥は、日南市の中核都市、伊東氏七百年の歴史をもつ城下町である。

昔、尋常小学校教本に「飯どころ」と題する韻文があり、「いかり」ところは孝行の、曾我兄弟で知られたりとか出ていたが、その曾我兄弟に殺された工藤祐経を始祖とし、伊豆の伊東から転封、伊東祐時を初代とし、鎌倉一南北朝一室町一江戸と、連綿三三三代七四五年に亘る治政の歴史をもっている。昔我兄弟はこの伊東氏

であるから、いかりとこ(鹿木風)が定紋である。

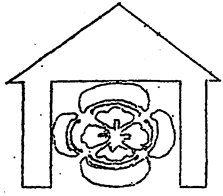
バスは、大手門ま近いとまった。見ると

パンフレットにある大手門をこわして、

樽門構えの旧大手門に復元改築中である。

門をくぐれば厳重な石垣が高くせまり、

城内宏潤、本丸跡には広場があり、学校



(いかりとこ)

也公共施設も次々と設けられている。しかし旧城址として日南市がその愛護整備に力を入れていることは、大手門の復元改築でうかがえる。うしろのことである。

今、パンフレットを要約すれば、伊東家と飯肥藩の歴史は、大凡そ次の通りである。

・鎌倉時代建久元年、工藤祐経が日向の地頭職(目司)となす。

・六代目伊東祐持、足利尊氏より都筑郡三〇〇町を賜る。

・十代祐徳、武勇すべし土持を北に追ひ、島津と飯肥を争う。

・天正五年家臣の叛乱あり、島津に追われ、一時大友氏に降す。

・天正一〇年(一六一三)伊東満所遣使節としてローマにわたる。

・天正一五年十八代伊東祐兵、秀吉の九州征伐に従って功多。

・飯肥・曾井・清武の諸城を賜ある。飯肥藩初まる。

・その後江戸時代、歴代藩主、産業を興し、藩政を勤め、民衆に力を注ぎ、治績大いにあがる。

・江戸時代野中金右衛門植林に励み、植林奉行五十年間に、飯肥ときげは、すぶオビスギで佐伯地方でも植栽して

いる。成長が早く持質が強く、屈曲に耐えるので斧甲(ノコギリ)として評判が高い。さすが本場だけあって、目の届く限り山々、伸びのよい美林である。

・残念なことにはバスの時間制限され、伊東家累世の墓大迫寺の石塔、小村孝太郎銅像などめぐれなかつた。再造の機会にゆずらう。

なお、三箇峠に記念碑のある、西南の役戦死者、山田宗賢以下十数名の薩軍兵士は、まご飯肥藩の士族である

ことを付け加えておく。

(旅行参加者へおことわり)探訪がすんでバスに乗る前、一部のものが手に入れたパンフレットは、足りない分をすずか諸君へ送らせてあげ、昼食の際記録した入手者のメモ、がどうしても見つからないので、送れないで困っている。希望者は電報でどうぞ。

(閉)